

「御国が来ますように」 マタイ 6:9-10

今日の箇所は、イエス様がこう祈りなさいと教えられた「主の祈り」と呼ばれている箇所です。まず最初に、「天におられるわたしたちの父よ」(6節)と祈ります。それは、天の父なる神様に対して、「私はあなたの子供です。あなたのものです。」という告白です。

次に「御名が崇められますように」祈りなさいと教えています。人間の罪の始まりは、アダムとエバがエデンの園で蛇(サタン)から「自分が神のようになれる」と聞き、その誘惑に負け、神から離れた状態になってしまったところにあるのです。その結果、神を崇めるはずが自分を崇め、自分第一となってしまったのです。本来神によって造られた人間は、造り主なる神を見上げて生きる、つまり、御名を崇める存在として造られました。それなのに、罪を指摘されたアダムとエバは、互いに責任をなすりつけ、神を避けてしまいました。これが罪人の姿です。イエス様は、主の祈りで、「上を見上げなさい。御名を崇めて生きなさい。」と教えてくださっているのです。

ルカ 1:46-55 は、マリアが聖霊によって身ごもった時、神を崇めて歌った「マリアの讃歌」と呼ばれる箇所です。これは「マグニフィカ」と呼ばれ、英語では「magnify」、最大限に大きくするという意味です。その機能を持った虫メガネは「magnify glass」と言いますね。マリアの讃歌がマグニフィカと呼ばれるのは、たとえ私たちは小さなものであっても、私たちのうちに住んでくださる聖霊が最大限の臨在を持って現れてくださるという感謝と驚きを持ってマリアが歌ったからです。御名を崇めるとは、内なるお方が大きく現れるようにという祈りです。

聖書協会共同訳聖書では、「御名が聖とされますように」とこの箇所を訳しています。聖なる神様の前に、自らも聖とされますようにという祈りが込められています。「御名が聖とされますように」とは、私たち自身が聖められますようにという祈りも込められているのです。

さらに、「御国が来ますように」と祈りが続きます。神のご支配があるところが御国(神の国)です。しかし、アダムとエバが罪を犯したことによって、人間は神の支配から離れ、自分の王国をつくってしまったのです。自分の王国といっても、人間というものは、自分以外の何かに頼らなければ生きてい

けない存在です。だから自分にとって都合の良い「偶像」を生み出してきたのです。

そんな私たちのために、父なる神様は、ひとり子イエス様をこの世に送ってくださって、私たちをもう一度神の愛のご支配の下に戻そうとして下さったのです。私たちはイエス様を信じ、救われて、内に聖霊様をいただき、神の国の中に再び入れていただいたわけですが、しかし、皆さんどうでしょうか。神以外の偶像を、手放すべきなのに握りしめ、そのために一番大切ないのち、永遠のいのちを奪われてしまう危険にさらされていないでしょうか。

皆さん、「御国が来ますように」と祈る時、まずは私の心に御国(神のご支配)が回復しますようにと、聖霊様に私を明け渡す思いをもって祈ろうではありませんか。

「神の国はあなたがたの間にあるのだ。」とルカ 17:21 に記されています。まず私たち自身の内の神の国が回復され、兄弟姉妹の間で愛し合い仕え合うなら、このみことばのように、神の国はあなたがたの間にあるということが実現し、神の国がどんどんと拡大していくのです。このためにこそ、イエス様はこの世に来てくださったのです。

そして「御心が行われますように/天におけるように地の上にも。」と祈りは続きます。イエス様は地上での生涯で完全に父なる神のみこころに服従されました。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」(マタイ 26:39) ゲッセマネの園でのイエス様の祈りです。

この「杯」は、私たちの罪が満ちている杯ではないでしょうか。罪のないイエス様にとって、それを飲み干すのはどれほどの苦痛だったでしょう。さらに42節では「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」と祈られました。その杯は過ぎ去らない杯でした。イエス様しか飲み干すことができない杯でした。イエス様の十字架なしでは、私たちの罪の赦しはないのです。

私たちが「主の祈り」を祈る時、一人一人のうちに神が最大限に現れてくださり、神の国が私たちのうちに、また私たちの間に実現しますように、私をなおも造り変えてくださいと、祈るお互いであろうではありませんか。

